武蔵野日曜集会

福音の奥義

——ヨハネ15・1～4、使徒5・19、12・6～7、16・24～32——

1992年5月31日

小池辰雄

愛の証者　賀川豊彦　我は真の葡萄の樹　わが語りたる言は成就する　信交　我に居れば何でもで
きる　中世の神秘家　十字架の聖ヨハネの『霊の暗夜』　福音の奥義

【ヨハネ】
「[1]我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。[2]おおよそ我にありて果を結ばぬ
枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔め
たもう。[3]汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。[4]我に居れ、さら
ば我なんじらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、
汝らも我に居らずば亦然り。」（ヨハネ15・1～4）

【使徒行伝】
「[19]然るに主の使、夜、獄の戸をひらき、彼らを連れ出して言う……」（使徒5・
19）
「[6]ヘロデこれを曳き出さんとする其の前の夜、ペテロは二つの鎖にて繋がれ、
二人の兵卒のあいだに眠り、番兵らは門口にいて獄を守りたるに、[7]視よ、
主の使ペテロの傍らに立ちて、光明室内にかがやく、御使かれの脇をたたき、
覚していう『疾く起きよ』……」（使徒12・6～7）
「[24]獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きた
り。[25]夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人ら聞きいたるに、
[26]俄に大なる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、その戸たちどろに皆ひらけ、
凡ての囚人の縄めとけたり。[27]獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人
にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、[28]パウロ大声に呼わり
て言う『みずから害うな、我ら皆ここに在り』[29]獄守、燈火を求め、駆け入
りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、[30]之を連れ出して言う『君等よ、
われ救われん為に何をなすべきか』[31]二人は言う『主イエスを信ぜよ、然ら
ば汝も汝の家族も救われん』[32]斯て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々
とに語れり。」（使徒16・24～32）

●愛の証者 賀川豊彦

こないだ、賀川豊彦のことを大分話しましたが、本当はあれでもなお足りない。福音の証者として、明治の少し前から、新島襄、内村鑑三、賀川豊彦、藤井武。新島先生は教育の方の先駆者です。内村先生は異色の人ですけれども、教会を否定しているわけではない。パウロが言っているとおり、キリストの体としてのエクレシアは大事な存在です。

ところが、「無教会」という言い方は歴史的には意味があったが、いつまでも無教会という言い方は、私は感心しないと思う。正しい意味において、教会、エクレシアというものは――我々の召団もそういう意味においてはエクレシアの一つです――あるのだから。無教会の流れは、歴史的に言うと、もちろん聖書の研究において大いに貢献した。聖書の研究、学問的な研究というのが、やっぱり無教会の主流です。ですから、信仰がどうしても観念的になる。十字架はもちろん土台で結構なんですけれども、それもやや観念的である。観念と言い切るわけにはいきませんけれども、そういう性格が強い。私は無教会に育ったからよく分かっています。

手島さんと私が阿蘇で聖霊のバプテスマの体験をさせられた。それで、

「使徒的な信仰は、原始の信仰は、正に聖霊の生きている信交だ」

と。こういう意味で、新しい流れが生じたわけです。十字架の土台のもとに聖霊という――これは特に召団においては十字架は大黒柱ですから、聖霊はその幕屋に充満しているところの事態です――このことは皆さんが本当に身をもって証していただきたいわけです。

その点で、手島さんとはちょっと性格の違ったところがありますから、手島さんは手島さん。いわゆる「マクヤ」といっている「原始福音」のグループは、それはそれで充分大事な役割を果たしておられる。人間は、どうせ、それぞれ役割があるので、その自分の役割をしっかりやっていくことが大事なんです。

賀川豊彦を私はもっと早くからこれに気が付くべきであったんですが、本当に愛の証者です。キリストの愛を、どん底の人たちを相手にして、展開していった。これも聖霊の力ですから。聖霊の力でなければ、賀川さんはとてもあれだけもたない。もちろん賀川さんも十字架と聖霊です。

コリント前書13章で言っているパウロのあの愛よりも、賀川さんの愛の現実はもっと深い。もちろん、パウロは現実に驚くべき愛の人であった。ただ、13章で語られていることは、ちょっと、パウロが実践した愛よりも浅い。愛のことがもっと深く言われて結構だったたんですが、その点、ちょっと惜しいと私は思う。私はそのことに最近、気が付きました。

しかし、説明はどうでもいい。事実、愛を生きたか、生きなかったか。キリストが、天国に行く人の資格を羊と山羊に例えた。愛を実践した人が天国に行けるので、愛を語ったり或は信仰を語ったりしているのが行くのではない。問題は、本当に人を助けたか。その実存が天国の資格であるということは、キリストはあの譬えで言っておられる。もちろん、

たけれども、片一方の盗賊みたいに、いきなり天界に連れていかれる人もある。ですから、福音の世界は、各人が神さまにどのように見られているか。そして、誰が本当に天国に行かれるのか、これは人の品定めをする必要はない。一人びとりが本当にそのように生きることだけです。信仰の世界も批判は要らない。自由ですから。しかしながら、同じグループにいる人たちは、やはり同じ気持を持っていきたい。これは間違いのないところでしょう。

キリストは神学ではない。それは大事な要素だ。しかしながら、ちっとも愛ができなかっ

●我は真の葡萄の樹

今日申し上げることは、「福音の奥義」の現実はどういうものか、ということです。それはヨハネ伝15章の「葡萄の樹の譬」です。キリストは、

「**自分は本当の葡萄の樹だ**」

とおっしゃった。面白いですね。葡萄の樹はいくらでもそこらにあるんだけれども、ところが、

「**自分が本当の葡萄の樹だ**」

という、言い方が非常におもしろい。「例えば、葡萄の樹だ」とは言わない。

「[1]**我は真**(まこと)**の葡萄の樹なり**」（ヨハネ15・1）

という。

「そこらの葡萄の樹は枯れたりするかも知れないけれども、この葡萄の樹は枯れないぞ。本当の生命があるんだ」

という意味で「真の葡萄の樹」と仰った。

「植物の葡萄の樹のもう一つ次元の高い葡萄の樹だ」

というわけです。

「[2]**我にありて果**(み)**を結ばぬ枝は、父これを除く。**」（ヨハネ15・2）

だから、この葡萄の樹は枝、葉、花が出て果が成る。どこまでも、この幹に、根幹につながっていなければダメだと。根のことは言ってないけれども、本当は根幹とキリストは言われて良かったんです。

「我は葡萄の根幹なり」

と。根がなければ、幹はダメですから。樹と言われたのは、もちろん根幹の意味でしょう。

「連なっていないような枝、虫に喰われているような枝はダメだ、果を結ばないような枝はダメだ。どこまでも私の生命に連なっていろ」

ということです。

●わが語りたる言は成就する

「[3]**汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。**」（ヨハネ15・3）

という、キリストの言葉は非常に深いものだから、私たちはこういう言葉に躓く。キリストは、言葉をただ「聞く」と思っていない。言葉を受けとったら、その言葉の現実に入る。「キリストの信」というのは、キリストが「信ずる」と言うときには、その中に本当に入ってキリストの信と一つになる。キリストは、神学者ではないですから、そういうことを詳しくは仰らない。だから、キリストの現実というのはすべて、本当に信じればそれは必ず行に展開していく。だから、自分（キリスト）の言を聞けば、その言は聞いた人において成就する、成る。その角度なんです。ということは、キリストは神さまの言を聞くと、すぐ、その言葉が現実になる。キリストはすぐ行為に、生命になる、光になる。そういう、寸分ずれのないような在り方がキリストの在り方です。我々に対して、

「言を本当に聞いたら、もうそれでお前は潔くなった」

と仰る。「聞いたら」ということは、

「本当に受けとったら、身体で受けとったら」

ということです。だから、

「語りたる言により、既に潔し」

とはそういうことなんです。非常にずれのない世界です。大体、みんな分析して解釈するから、いつまでたっても始まらない。分析は要らない。

●信交

「4**我に居れ、さらば我なんじらに居らん。**」（ヨハネ15・4）

「私に居なさい、連なって居なさい、そうしたら、私もお前たちと一緒になる」

と。これがみな、幹と枝とが一如の世界です。一如という言葉が一番よくそれを表す。だから、私は「信仰」の仰の字を交、「信交」と書く。仰いでいるのではない。何も信仰と言うときに皆、仰ぐなんて思ってはいないでしょうけれども、元々、仰ぐというところから始まっているから。その概念をもうひとつ新しくするために、私は特別に「しんこう」の「こう」の字は、交わると書く。幹と枝とが生命で交わっている世界、一如の世界です。真如でもいい。だから、福音の奥義はそのような、キリストが葡萄の樹で、枝と一つとなっている。そうしたら、必ず果が結ぶ。そういうのが、実は福音の奥義である。パウロが、

「我れキリストの中に、キリスト我がうちに」

と言ったのが、このことなんだ。ヨハネ伝と同じだ。

「パウロのキリスト神秘」という。ダイスマン（アドルフ・ダイスマン1864～1937）という学者がパウロのことを書いた有名な本がありますが、そこに特に「クリストゥス・ミスティーク」「キリスト神秘」と書いてある。パウロがいかに、「我れキリストの中に、キリスト我がうちに」という、その現実でもって動いていたか。パウロの信交というものは、完全にキリストと一つとされている事態だ。

「神の子であることを信ずる。贖罪を信ずる」とか、そんな事柄を信じているのではない。贖罪というならもう、贖罪されている事態を受けとっている。

「我れキリストと共に十字架せられたり」

というのが、これがパウロの現実なんだ。

「もはや我れ生くるにあらず、キリストわが内に在りて生き給うなり」

というのが信交の現実なんだ。

まぁ、私は無教会で育って、そこのところが本当は受けとれていなかった。頭では分かっていたけれども、頭で分かっている世界ではない。頭で分かっているから、聖霊がいつまでたっても来ない。本当にそれを受けとるところに来るというと、もうぶっ倒れるような世界に来るというと、そうすると、聖霊が臨んでくる。グワーッとキリストの力が来る、生命が来る、光が貫く。もう言うことがない。

●我に居れば何でもできる

「[4]**我に居れ、さらば我なんじらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。**」（ヨハネ15・4）

「居れば、何でもできるぞ。居なかったら、ダメぞ。お前がやりたいことは何でもできるようになるぞ」

と。キリストは絵描きではないですから、キリストは絵が書けたかというと、そうではない。キリストだって、地上におけるキリストはちゃんと、能力はもう決まっている。ただ、キリストは神さまの生命を生命していた。それを証していたひとだから。そして、人を生命づけていたから、死人をも甦らせる。永遠の生命の証者だ。永遠の生命の証者は愛をもって人を救っていく。だから、天国を現じていた。福音書を読めば、福音書は、キリストが天国を現じながら歩いておられた。だから、読んでいると、福音書が一番楽しい。いつも天国に入ってしまう。「斯くせよ」とか、「すべからず」なんて言ったって、

「私がさせてやるぞ。そんなことはしないぞ」

と。そういうように読んでいかなければダメです。私はパウロの言葉をも乗り越えてしまう。

「七面倒臭いことは言わないでいいよ」

と。

あの賀川豊彦はそのキリストの愛を本当に受けとって、やり切れなくなって、もう本当にそれでもって、たくさんの病にむしばまれながら――病だらけだ、普通ならもたないです――あれだけの仕事をした。いやぁ全く私は参ったね。賀川さんの実存の事実の前には無条件に頭を下げる。それは無教会にはなかった。賀川さんは本当のキリストの僕だ。だから、世界では内村鑑三よりか賀川豊彦の方が知られている。

日米戦争をくい止めようとして、いかにやったか。一週間、徹夜で祈った。燈火を点してね。そしたら、一週間目に燈火が消えた。それが12月8日、日本がパールハーバーを攻撃した日なんです。それだけの人なんです、あの人は。最後は伝道しながら仆れた。戦争に負けてもなお伝道を続けた。四国で伝道しているうちに仆れた。

キリストと一つになると、キリストの愛が、キリストの生命が、キリストの光が、おのずからその人らしく展開せざるを得ない。せよではない。せざるを得ない世界です。

「何々せよと言われるからやります」

というのは、まだそんな世界は本当ではない。

「何もおっしゃらなくて結構です。せざるを得ません」

と。我々は、研究にしろ何にしろ、すべてそうです。心配要らんですよ、

「また腰が痛くなるだろうか」

なんて、そんなことを思うことは一つもないですから。

「キリストの力で行きます」

と――信の世界は分析は要らない――全的に受けとっていく。そうすると、その気合で治ってしまう。皆さん、どうぞ、気合で生きてくださいよ。

●中世の神秘家

「十字架の聖ヨハネ」という人がいる。1542年から1591年、16世紀の人で、ルターがちょうど死んだ頃から、49歳で仆れた。この人はやはり異端視された。それで牢屋に入れられてしまった。ひどいもんだな。

あの頃の中世の神秘家というのは、いろいろな逆境に入れられた。しかしながら、中世の神秘家の最初の素晴らしい人は、トーマス・ア・ケンピス（1379～1471）――『キリストにならいて』という本がある――だとか、エックハルト（1260頃～1328頃）。エックハルトが一番素晴らしい。非常に知的な人ですけれども。それから、タウラー（1300?～1361）、これは非常に行動的な人です。それから、ゾイゼ（1295～1366）、あるいはズーゾーといいますけれども、これは非常に感情が豊かな人です。知、意、情と、ちょうど三人いますけれども、これが神秘家たち。大事な世界です。

またもう一人、名前の知れない、『ドイツ神学』という本を書いたフランクフルトの人。『フランクフルター』という本です。これはマルティン・ルターがその本を発見した。そしてルターはこれを読んで、

「アウグスティヌスの次に、この本の影響を自分は受けた」

という、非常に内面的、神秘的な世界をルターが受けとった。

その中世の神秘家というのが非常に大事なんです。神秘家たちはむしろ、旧約の「雅歌書」を――普通、雅歌書は恋愛の書のように思うけれども、外側はそうですけれども――キリ

ストと自分との愛の関係、それを雅歌書において見ていったわけです。ベルナール（クレルヴォーの聖ベルナール1093～1153）というのは特にそうです。

十字架のヨハネも、非常にそういった、神・キリストと深く一つになる世界、その瞑想の世界が凄かった。牢屋に入れられたけれども――真っ暗だ、ほとんど光が通らないような牢屋だ――その神秘の世界にグーッと入って、

「暗闇においてこそ本当の光を、神の光を見た。これはありがたい、これは天国だ」

と。そのうちに、不思議なことに――牢屋から自分はどうして出たか知らない――牢屋から自然に外に出てしまった。

これは使徒行伝にあるでしょ。使徒行伝の5章と12章と16章にある。そういう不思議なことがあるんだね。

「19然るに主の使、夜、獄(ひとや)の戸をひらき、彼らを連れ出して言う……」（使徒5・19）

と。皆、知らないで出て行ってしまった。それから、12章でペテロが出た。鎖に繋がれながら、それが解けてしまった。

「6ヘロデこれを曳(ひ)き出さんとする其の前の夜、ペテロは二つの鎖にて繋がれ、
二人の兵卒のあいだに眠り、番兵らは門口にいて獄を守りたるに、7視よ、
主の使ペテロの傍らに立ちて、光明室内にかがやく、御使かれの脇をたたき、
覚していう『疾(と)く起きよ』……」（使徒12・6～7）

といって、鎖が手から落ちてしまった。そして、どんどん、知らない間に町にまで行ってしまった。パウロもそうだ。16章24節から、

「24獄守(ひとやもり)この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎(かせ)にてその足を締め置きた
り。25夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人(めしうど)ら聞きいたるに、
26俄(にわか)に大なる地震おこりて牢舎(ろうや)の基(もとい)ふるい動き、その戸たちどろに皆ひらけ、
凡ての囚人の縄めとけたり。27獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人
にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、28パウロ大声に呼わり
て言う『みずから害(そこな)うな、我ら皆ここに在り』29獄守、燈火(ともしび)を求め、駆け入
りて戦(おのの)きつつパウロとシラスとの前に平伏し、30之を連れ出して言う『君等(きみたち)よ、
われ救われん為に何をなすべきか』31二人は言う『主イエスを信ぜよ、然ら
ば汝も汝の家族も救われん』32斯て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々
とに語れり。」（使徒16・24～32）

こういう、キリストと本当に一つとなっている現実というのはもの凄いものだ。

●十字架の聖ヨハネの『霊の暗夜』

「十字架の聖ヨハネ」の

『霊の暗夜』（“Noche Oscura des Alma”）
という標題の詩です。
「霊の闇の夜が実は本当の光だ」
と。ヨハネがそこでもって詩を書いた。
「悩ましい燃える愛をいただいているところの暗い夜、なんと楽しい運命ではないか。
誰にも気付かれないで、私は行った。
私の家庭は安らかに今、眠っている。
暗闇において、また安らけく不思議なきざはしによって、変装して出かけていった。
何と楽しい運命ではないか。
暗闇において、しかも深く隠されて行った。
まだ家は安らいでいる。
その楽しい夜に、誰にも見られずに、神秘のうちに、また自分自身をも見ずに、
他の光もなしに、あるいはまた導きもなしに、
それは私の心の中に燃えていたところのものの他にはいかなる光もない。」
キリストと一つになっていると、こんなに明るくて、しかも、不思議な導きによっている。牢屋はもう天国だ、というわけです。他のものが何も見えないのが、むしろ逆に本当にキリストが見えてきた。キリストの本当の光が来たので、闇こそが、魂の暗い闇が本当の霊の世界だと。
「その光が私を導いた。
そして、真昼の太陽よりももっと明らかにしっかりと私を導いてくれた。
神さまが私を待っていらっしゃる、そういった所に連れて行った。
その神さまを私はよく知っていた。
そこには他の誰も現れてこなかった。
明け方よりももっと愛すべき夜よ、私を導いてくれる夜よ。
愛するものを、愛せられる者
即ち神・キリストのこと
と一つにしてくれたところの夜よ。
おお、私の花咲くところの胸の上に、
全く神さまのためにのみとっておいたところの、その花咲く胸の上に、
そこに彼は憩うて眠りたもうた。
自分の胸に神さまが休んで眠られたと、こんなことはちょっと言えない言葉です。
そして、私は彼に抱きついた。
香柏のそよぎが神さまに風を送っていた。
そのようにして神さまを慰めてあげた。

彼の髪の毛がそよ風の中でもって漂っていた時に、
そのそよ風というのは塔から吹いてきたところのそのそよ風の中で、
彼の髪の毛がただよっていた時に、
彼は優しい手でもって私の首をお叩きになった。
そうすると、私は楽しいものだから他の情動は私から去ってしまった。
神さまだけだ。
忘却の中で、私は続けていた。
ほとんど他のものは忘れていた。
私の頭は愛するもの、キリストの上に私の頭は安らうていた。
キリストを枕にしている。一切のものを失い、また自分自身をも失っているような境地だ。
そして、百合の中で自分自身をも忘れて、
私のいろんな心配も全部、投げ捨ててしまった。」

そういう、神・キリストと一つになった妙境である、という詩です。そういう詩を牢屋の中で作って、そして、知らない間に導かれて出て行ってしまった。

●福音の奥義

何故、私はこんな詩を紹介したかというと、

「**我に居れ。我れなんじのうちに**」

という、その一如の世界に、この十字架のヨハネは本当に牢屋の中で入ったから、それがもう天国で、そしてしかも、知らない間に自分は外に出て行ってしまった。どうやって出たか知らんと。

福音の奥義の世界です。そうすると、そこは非常に深い世界です。深さというものがないとダメなんです、ただ烈しさだけでは。本当の深さを持っていると、時があると、爆発する。しょっちゅう爆発しようなんて思って、「ワッショイ、ワッショイ」とやっているような信仰はくたびれてしまう。ところが、深いものを衷に持っていると、それが今度は、ちょうど火山と同じだ、時あってか爆発する。

「福音の証者」は賀川さんのこと。「福音の奥義」の世界は、それを牢屋の中で証した十字架のヨハネのこと。それを、皆さん、覚えておいてください。